

女の一生

全国染織めぐり in 伊勢・滋賀

現在、全国に230品目ある、
経産省指定伝統的工芸品。

今回は、経産省指定伝統的工芸品を基に
伊勢・滋賀の染めと織りを紹介します。

伊勢木綿

伊勢は津でもつ津は伊勢でもつ、尾張名古屋は城でもつと歌われた様に、伊勢の国の中心地であった津の周辺は、絹(伊勢紬)、麻(津もじ)、木綿(伊勢木綿)の産地でありました。木綿の柄は地方による違いはあまりなく、今も昔も基本的なパターンは変わりがありません。

独自性が出るのは糸と染織です。

伊勢木綿は単糸(たんし)という一番ベーシックな糸を使用しています。その単糸は、アメリカ製のサンホーキンスという最高級の綿を芯にした糸で、明治時代に倉敷紡績が開発した「三馬」(みつうま)というブランドのものであるのです。単糸は切れやすく織るのが非常に難しく、いい綿を使った単糸でないと織ることができません。単糸の長所として、糸がやわらかいのでシワにならないということがあります。やわらかくて肌触りが良く保湿性や通気性も良いので、使い込めば使い込むほど、味がでるのです。



松坂木綿

「松坂もめん」は、天然藍の先染め糸を使って織り成す縞柄が特徴で、染め方で微妙な濃淡を表現できることで、デザインは無限にあるといってもよいほど。

着る人を選ばず、老若男女、どなたにでも合わせられ、日本人の肌の色にもよく映えることと、木綿という手軽さから、少しずつ人気が高まりつつあります。



伊賀くみひも

伊賀くみひもは、絹糸を主に金銀糸などを組糸に使い、角台・丸台・高台などの伝統的な組台を用いて織細な美しさをもつ紐に編み上げたもので、「帯締」などとして和装には欠かせない工芸品です。

その起源は奈良時代以前にさかのぼるといわれ、当初は経巻や仏具・神具の紐として用いられました。伊賀地域の気候は養蚕に適していたこと、また文化の中心である京都に近いことなどもあり、明治時代中期から本格的に産業として発展しました。特に高台による手組み紐が有名で、全国生産の大半を占めています。



近江上布

近江上布とは、愛知川の豊かな水と高い湿度といった環境や、近江商人の活躍等により、この地方では鎌倉時代から麻織物が発展しました。

江戸時代には、琵琶湖東岸の彦根市の辺りを支配していた彦根藩の振興によりさらに発展し、安定した地場産業となりました。その頃から染めの技術も大きく進歩し、近江上布独特の上品な縞模様が生まれました。



秦荘紬

秦荘紬とは、滋賀県発祥の紬。滋賀県といえば近江上布ですが、その地である秦荘町で製作された紬です。近江上布の原料は麻ですが、秦荘紬は絹から製作された紬となります。

滋賀では絹織物の生産も行われており、養蚕で採れた質の良い繭は売り、余りの繭で着物を製作し、くず繭は真綿へと変えて着物を紡いでいました。農家の女性が嫁入り支度をする際に、自分自身で機織りをし、着物の準備をしたのが秦荘紬のルーツであるといわれています。

